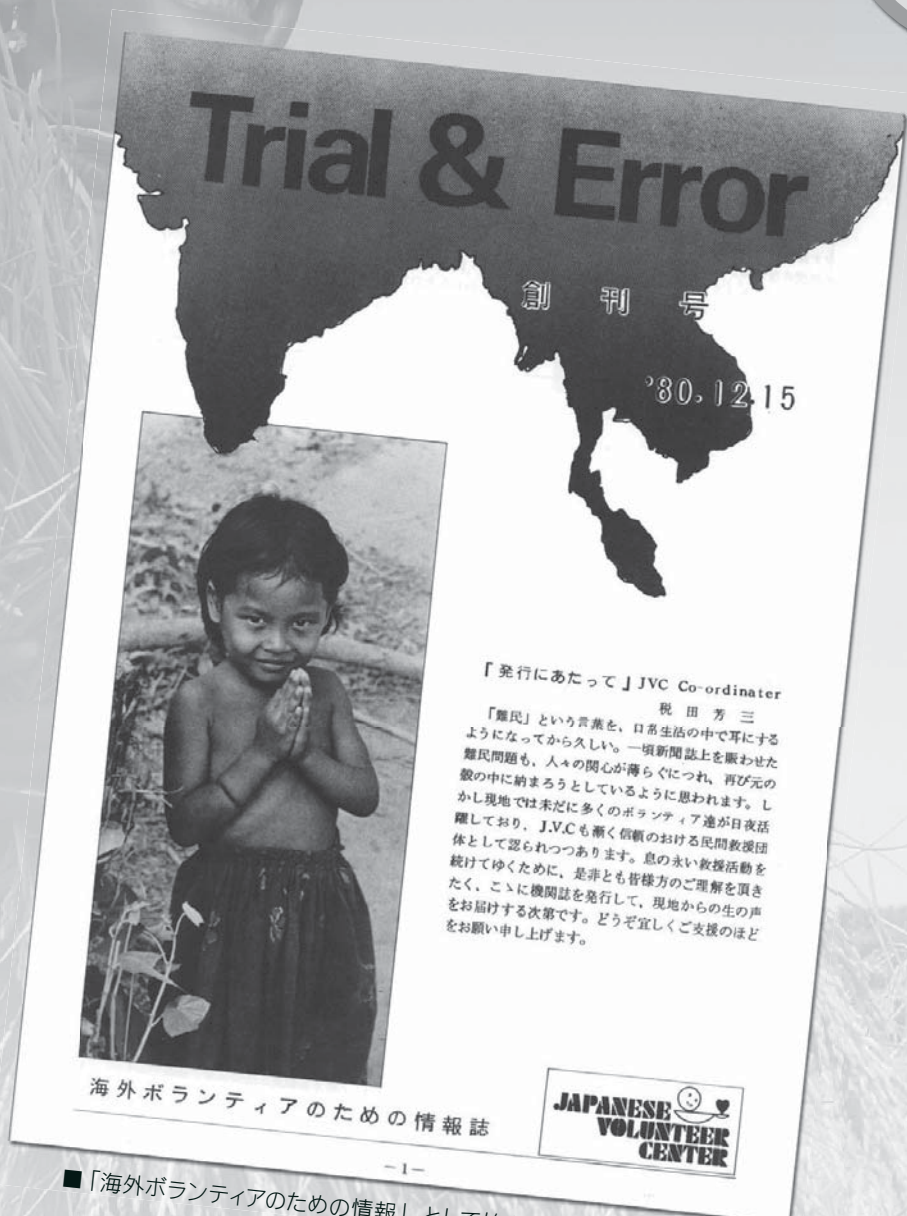


Trial & Error

No.280

May-June 2010



■「海外ボランティアのための情報」として始まった本誌創刊号。

特集

30歳にしてどこに立っているか



特集

30歳にしてどこに立っているか

1980年2月に発足したJVCも、2010年で30歳になった。これまでのさまざまな活動経緯をいちどきに振り返ることは難しく、また世の中を見ても「これで一区切り」とはとても呼べない状況にあることは確かだ。まだまだ走り続けるために、ここではJVCのあり方、DNAのようなものを確認したい。(編集部)

三十年の歴史を糧に 危機の時代に立ち向かう

JVC代表理事 谷山博史



■人と組織のスピリッツ

JVCは、三十年前インドシナ難民を救おうとタイに駆けつけた若者たちと在タイの主婦のグループが中心となって設立されました。誰に命じられたのではなく、自分たちの意志の命じるところに従って、難民を助けるといふ一点の目標のもとに結集したのです。

この私たちの出自は三十年経っても組織のDNAに深く刻まれています。一人ひとりが組織を担っている、JVCで実現しようとする目標が私たちの生き方の目標でもあるという、人と組織のスピリッツに息づいているのです。従ってJVCは人を助けるという世界との向き合い方を越えて、自ら当事者として世界を変えるという関わり方を目指すようになったのです。その後、冷戦の真只中にあったカンボジアへ、ラオス

へ、ベトナムへと難民の故国の人々を支援するために入って行きました。バンコクのスラムの劣悪な生活環境を改善する活動を始める一方で、タイの農村の支援活動も始まりました。ソマリアの難民支援、エチオピアの飢饉に際しての救援活動と農村の再生、アパルトヘイト下の南アフリカやイスラエル占領下のパレスチナでの人間の尊厳を守るための活動、アフガニスタン戦争やイラク戦争に際しての緊急救援と復興支援、内戦が終結したスーダンでの復旧支援、そして北朝鮮と日本、韓国の子どものための平和のための交流活動というように、地域と領域を多様化させながら問題の根源へ根源へと活動を深化させていきました。

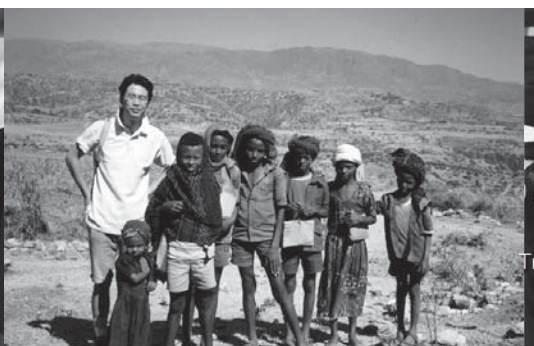
■世界は関係性の中に あるという認識

私たちは世界の問題と矛盾の

しわ寄せを受けている人々を支援していますが、世界の問題と矛盾には必ず原因があり、その原因は二重三重の複雑な問題群からなっていて、私たち自身の生活や日本という国の問題につながっています。世界は関係性の中にあるのです。カンボジアの人たち、アフガニスタンの人たちの問題は私たちの問題でもある。タイの人たち、イラクの人たちが苦しみと希望の中で問題を解決しようとしていることは、私たちの問題を解決しようとしていることでもある。私たちはそう捉えて常に当事者意識をもって活動に取り組んでいるのです。次ページに掲載したJVCの長期目標は、このことを表現しています。

■経済成長は問題の 解決にはならない

冷戦が終わっても戦争はなくならないばかりか、「対テロ戦





■ JVC を形作ってきた数多くの人々。今の JVC の考え方は、(日本人に限らず) こうした人々が関わってきた様々な活動の経験から生まれてきた。

JVC 長期目標

人と自然が共存し、世界の人々が共に生きられる社会を築くために、
一、困難な状況の中で、自ら改善しようとする人々を支援します。
二、地球環境を守る新しい生き方を広め、対等・公正な人間関係を創りだします。

「争」の名のもとで一層暴虐になりました。カンボジアやラオスでは経済開発の名のもとで地方の農民の生活の拠り所であった土地や森林や川が政府や企業に接収され、農民は出稼ぎや農園での賃労働を余儀なくされています。お金に変えられない生活の安心、昔から培われてきた風土に生きる幸せを根こそぎにしても、「所得が増えれば貧困削減だ」という目茶苦茶な風潮と経済政策がまかり通っているのです。

過去数万年の人類の歴史は、圧倒的に長い停滞期と短い成長期を繰り返してきました。今私たちは産業革命以来ほんの二百年余りの成長期の末期に生きています。成長の前提であった自然資源の開発と人口増加が頭うちになっているからです。しかしどうでしょう、地球環境は悲鳴をあげているにもかかわらず、希少化する資源の争奪はさらに加速する勢いです。各国は経済競争に勝ち残るために安い労働力を求めてひた走っています。タイのビルマ人労働者の問題と日本の貧困問題がここで出会い、森が失われて「貧困化」するラオスの人々の問題、さらに環境問題や戦争の問題までもが構造的につながります。

■ 代案づくりに参加する

私たちは世界の問題の当事者として、その問題と矛盾が深刻に現れている海外の現場で、人々が自分の手で問題を解決する取り組みに参加します。それは地域から平和をつくること、人と自然、人と人とのつながりを取り戻して安心して生きられる多様な幸せの形を実現する取り組みです。JVCは三十年の試行錯誤を糧として、これから確実にやってくる危機の時代に向けて問題解決の代案提起を続けていきます。どうぞJVCの取り組みに参加してください。



これまでに多くの方々が会員やスタッフ、ボランティアとして関わってきたJVC。そのなかから、今回は4名の方にコメントをいただきました。

香川 友紀子

(タイボランティアチーム、タイの農村で学
ぶインターンシップ第九期生、〇六年度東京
事務所ホームページインターン)



JVCを通して出会ったご縁で、今年度は生活クラブ・たかつデポの運営委員長とWE21ジャパンの理事をすることになりました。どんな活動でも、タイや国内業務で学んだ気持ち根底にあり、「変えられることを変えてゆく勇氣」になって背中をポンと押してくれそうです。

日常生活のなかで痛感するのは、私たちは足を下ろしているこの地の状況をあまりに知らない、歴史も現実と結びつかない形でしか学ぶことができなかったということです。こうした無知・無関心が少しずつ生活を脅かし、社会を歪ませているのではない。第二子を昨年迎えて、将来への不安は喜びと同じ分だけ、以前より強く感じます。大根が大根の値段で手に入る生活、家族で食卓を囲み、暖かく護られた眠りにつく生活があと何年続くのだろうか。

所を越えて共通する、これはすごいことだぞと思いつき、女性の気付きとなる活動をしていきます。しかし、活動を続けることはちっともパーパスにならないし、パソコンを夜遅くまで使って電気はくうし、たくさんジレンマに出会います。それでも、農家の知人から野菜を買おう、なんでも買わないで作るう、とできることのいくつかは頑なに続けていましたが、子どもを二人迎えてみると、やっぱりライラしたり不満がでたり。環境に負担が少ないかもしれませんが、家族にストレスフルな環境を押しつけるときも。JVCとの出会いは、人間の存在を否定して後ろ向きにしか社会を見られなかった私に、「変えてゆける」と思える勇氣を教えてくれました。しかしJVCから少し出てみると、モチベーションを保つのも難しく、また自分のライフステージも変化していきます。柔軟であることは本当に大切です。多くの出会いの場であるJVCはいつも私の帰る家です。

佐藤 美千代

(会員/カンボジアボランティアチーム)



JVC創立三十周年、おめでとうございます。カンボジアボランティアチームでは大変お世話になりました！岩崎駿介さんの講演を聞いて「自分も何かしたい！」と緊張して事務所を訪れた時、誘われるまま参加することになったのがカンボジアボランティアチームでした。

当時は日本初のPKO派遣などなにかとカンボジアが話題に上っていた時期。国の事情など何も知らなかった私ですが、そこでボランティアとして過ごした数年間、資金源となる使用済みテレカを集めたり、数々のシンポジウムや学習会・イベントの企画・運営のお手伝いをする中で、「ボランティアは奉仕ではなく、自発的意思をもって責任ある行動をとる人のこと」「カンボジア支援では深井戸よりも地元の人々が自立してメンテナンスできる浅井戸を掘る」「支援者は地元住民のやる気を引き出すことが大切」など多くのことを学ばせていただきました。

その後、東京都日野市を最終の住処と決めてからは、「3log, act log」の精神で地域の人材と資源を活用した「まちの生ごみ活かし隊」を仲間と発足。住民の居場所ともなる「せせらぎ農園」というコミュニティガーデンを運営しています。市や福祉施設と協働で近隣約二百世帯の生ごみを回収し、畑に直接投入して「土」と発酵させ、そこで無農薬・無化学肥料で野菜やお花を作っています。このように、あえて都会の街中で生ごみの分解過程を「見える化」することは、住民の生ごみ減量だけでなく、命の循環、食育、地域の自然環境保全、心身の健康増進やコミュニティ再生などの効果があると考えています。地域の人々を巻き込むこのまちづくり活動において、JVCに教わったポリシーは、今でも私の大切な心構えとなっています！

高柳 彰夫

(会員)



はじめてJVCの活動に触れたのは、八〇年代後半、大学院生としてNGOの研究を始めたころではなかったかと思えます。その後九〇年から週二、三日JANIC（現国際協力NGOセンター）でパートタイム職員として働く機会をいただきました。そのころからJVCの皆様とも共同でさまざまな活動を行なうことが多くなりました。

九三年、北九州大学（当時、

〇一年から北九州市立大学）外国語学部国際関係学科に赴任、JVCに九州の会員自主組織としてJVC九州ネットワークを紹介していただき、これに参加、九五年から七年間代表を務めました。その間、毎年のようにJVCのスタッフの方をお迎えして報告会などを開催しました。二〇〇〇年にはJVC二十周年とあわせてシンポジウムを開催し、また北九大の授業でもスタッフの方をゲストスピーカーとしてお招きしました。

〇二年、フェリス女学院大学国際交流学部に移籍し、首都圏

に戻ってきました。隔年でのアジア・アフリカをテーマにした外部講師のリレー方式の科目でも、毎回JVC関係の方にご出講いただいております。本当は首都圏に戻ったのを機会に、どこかのチームでボランティアとして参加したい気持ちだったのですが、フェリスでは着任してすぐ学務の役職に就くことになり、その余裕がない状況なのが残念です。

振り返ってみれば、JVCには二十年以上もお世話になってきました。発足当時、日本ではNGO、市民の国際協力がほとんど社会的に認知されていない時代でした。十年後くらいからマスコミで取り上げられる機会が増え、その後NPO法の制定などでNGOの活動環境も変わりました。JVCは現場での活動のみならず、政策提言などの活動でも日本のNGOのパイオニアであり、また常に市民社会の国際協力の活動をリードしてきたと思います。

浜口 龍太

(カンボジア／スーダン難民帰還事業に従事)



私は台湾が日本の植民地だった時代に、台北で国民学校の教師の家に生まれた。父は戦時下の植民地の教師として、政府の政策を疑うことなく勤めていた。一家は終戦とともに引き揚げてきて戦後の社会とともに歩んできた。その過程で父は新しい社会に適応できず、貧乏で食

えなく、新聞配達で生活費を稼いだ少年期だった。支援してくれる人があり大学に進んだが、学生運動に熱中し中退した。その後、前歴を問わない職場として自動車修理業^{※注①}についた。

JVCには松井やよりの新聞記事^{※注②}がきっかけとなって参加した。カンボジア和平協定に基づき難民帰還事業の一端を担い、無事に勤めを果たして帰国した。その後、父のこともあり自宅の庭をガレージにして自営業となる。

そのころ、生活の仕方として六割を生活費の為に、三割を社会の為に使おうと決め、地域の

市民活動に積極的に参加し、障害者作業所や町会や医療生協に関わるようになった。

〇二年に父を送り、〇五年に短期間カンボジアの技術学校で働き、〇六年にスーダンで自動車修理工場の再建の為に働いた。

いま一番力を入れているのは、八王子保険生協という医療生協で、組合員の共助により医療・福祉・介護の安心・安全のネットワークを創る活動だ。人は他人の為にした以上のことを自分にしてもらうことは出来ない。私は一人の実践者として元気で働ける残りの人生を意義あるものにしたが為に働くつもりだ。

JVC会員の皆さん、JVCの存在と活動は本当に大切です。いつまでも初心を忘れず、現地で活動する仲間と同じ思いをもってそれぞれの持ち場で頑張らしましょう。

※注① 当時、朝日新聞編集委員。

谷山 博史 (代表理事)

ジョギングと菜園。どんなに忙しくても、人・自然・自分の体と対話できる余裕を持つ。

磯田 厚子 (副代表)

(多忙につきコメントをいただけませんでした)

清水 俊弘 (事務局長)

地元の町づくり推進委員として都会の人々との交流事業を活性化する!

島村 昌浩 (カンボジア/ラオス事業担当)

健康管理に心掛ける。昨年度に落とした体重の推移を、プラス 5kg 以内に留める。

川合 千穂 (ラオス事業担当)

10 年目にあたり、5 月末で JVC を卒業します。

下田 寛典 (タイ/アフガニスタン/コリア事業担当)

去年は料理でしたが、今年は掃除。デキる主夫を目指します!

宮田 敬子 (タイ事業担当)

大分からの上京生活の開始。まずは通勤電車で慣れることから始めます。

渡辺 直子 (南アフリカ事業担当/現地代表)

映画に感化されて南アでジャンベを衝動買い。無駄にしないよう練習します。

長谷部 貴俊 (アフガニスタン事業担当/現地代表)

アフガニスタンの夏、50 度の気温にも負けない体力づくり。

谷山 由子 (アフガニスタン事業担当補佐)

野菜のつくり方、津軽三味線、ナンの焼き方の腕をあげてお披露目したいなあ。

西 愛子 (保健アドバイザー)

活動地の村で星空を眺めるという夢を胸に、パシュトゥー語に再挑戦。一日一語。

藤屋 リカ (パレスチナ事業担当)

日本でも買えるようになったパレスチナ産オリーブオイル。和食とのコラボに挑戦。



後列(6名)左から:長谷部、武繁、細野、下田、広瀬、高橋
中列(7名)左から:川合、荻野、島村、藤屋、石川、谷山由、渡辺(原)
前列(7名)左から:西、佐伯、稲見、谷山博、清水、宮田、寺西
左枠内:磯田

太鼓&踊ります。いつでも呼んでください。

石川 朋子 (コンサート事務局)

中学生の時以来の手芸意欲が復活! 編み物、縫い物などモノ作りに励む。

東京事務所 (21 名)

JVC
STAFF
2010

30 周年の今年を
担うスタッフに
抱負を聞きました

カンボジア事務所 (18 名)



左から:山崎、(一人おいて) リツ、坂本、ロッド、スイネン、
ンダ、ウツサ、樋口、エン、ネアリー
左から:ナラット、ノブティム、ブンヒエン、コム、シネン、
マ、ブントウ、ソン

山崎 勝 (現地代表)

盆と正月は里帰りして、庭のマングーの木の世話をする。

サム・ネアリー (CLEAN コーディネーター)

健康の為にビールをストップ。健康診断に行き、健康のために運動する。

坂本 貴則 (CLEAN プロジェクト担当)

カンボジア全州訪問は難しかったので、モンドルキリとラタナキリを訪問する。

ムット・ロッド (CLEAN フィールド・スタッフ)

弟の高校進学を応援する。家族の幸せと彼氏との関係がうまくいきますように。

クン・コル (CLEAN シニア・トレーナー)

車の免許を取ることに。仕事の雰囲気を変えるぞー!

ナイ・シネン (CLEAN フィールド・スタッフ)

仕事をがんばる。英語を勉強する。スタッフ全員の健康を祈る。

バオ・リツ (CLEAN 運転手/総務補佐)

安全運転! 1 円でも多く稼いで、家族を支える。

オウ・ウツサ (CLEAN 環境教育シニア・トレーナー)

小学校の生徒たちに直接環境、衛生、教育について教える。

サイ・ボラ (CLEAN 環境教育コーディネーター)

新しいことを学び、そして手を取り合い行

動する。

樋口 正康 (CLEAN 環境教育担当)

問題を分析し、解決に向けて常にアクションを起こす。

イン・コック・エン (資料・情報センター (TRC) 司書)

TRC の新しいスタッフ 2 人がうまく働きますように。

ドゥオン・リンダ (経理担当)

Peaceful Mind ☆

ウン・ナラット (総務担当)

生きていくために本当に必要な力を身につける。

マオ・ブントウ (運転手/総務補佐)

結婚するので、新しい計画、新しい生活。

ノブ・ティム (技術学校アドバイザー)

友達とみんなが良い年を迎えられま

ダン・ソン (警備/TRC 補佐)

頑張って JVC の財産を守る。JVC がカンボジアを撤退するまで永久に働く。

チン・ブン・ヒエン (警備/TRC 補佐)

パソコンと英語を学ぶ。宝石・金細工職人になる。

サー・スイネン (清掃担当)

新しい商売を始めるために、貯金します。



後列左から：ナビ・ジャン、モハンマド、デラワール、ナシーム、ファザール・ハク、アガ・グル・パチャ、モハンマド・ナシール、ファヒーム・アマッド（長谷部）、アブドゥル・ワハブ、アミン、アブドゥル・ラジーク（西）
前列左から：ミル・ジャマール、アジマール・クーラム、サイード・サファラガ、イサヌラ・カタック、サビルッラー・メムラワル、グラライ、ザマヌラ

モハンマド・シャブール・サフィ

（医師、医療事業責任者）

世界のみんなと一緒に暮らせるよう仕事をがんばりたいし、もっと勉強していきたい。

アブドゥル・ワハブ（医師、地域保健担当）

アフガニスタンの人々が自立し、永く平和が持続していくことを願います。

サビルッラー・メムラワル（治安 / 総務）

アフガニスタンの人々のために尽くし、親族でやっている平和教育も進めていきたい。

サイード・サファラガ（医療事業アシスタント）

2010年には、農業や水の分野に支援の手を伸ばしていきたい！

ファヒーム・アマッド（経理）

アフガニスタンの発展に全国民が参加し、何人たりとも殺されない社会を願います。

イサヌラ・カタック（経理補佐）

アフガニスタンの伝統と文化を尊重し、皆が幸せになれるような国づくりをしたい。

モハンマド・ナシーム（医師、診療所所長）

世界の平和、とりわけアフガニスタンに平和が訪れることを願っています。

ディーダ（女性医師、診療所外来担当）

診療所に通う子どもと女性のためにより良いサービスを提供したいです。

モハンマド・アミン（診療所薬剤師）

仕事に真摯に取り組み、自分の能力向上に尽くしたい！

モハンマド・ラヒーム（診療所看護師）

イスラムの教えに則った暮らしの実現のために子どもたちにたくさん勉強してほしい！

グラライ（診療所検査技師）

アフガニスタンの発展のために、まずは診療所の患者さんを救っていききたいです。

ファザール・ハク（ワクチン接種担当）

診療所でのワクチン接種の技能向上を目指します。

モハンマド・ナシール（医師、簡易診療所所長）

世界の人たちが平和の実現のために尽くされることを願います。

ミル・ジャマール（簡易診療所薬局担当）

アフガニスタンの人々にとって穏やかで平和な年にしたいです。

アジマール・クーラム（教育担当）

1日に最低1人を励ます！そうすれば10年で3650の人を幸せにできますね！

シャー・モハンマド（運転手）

2010年が平和な年になるよう、アフガニスタンのために尽くしたいです。



枠内上から
ラヒーム
イザトゥッラー、
シャブール、
バスマナ
ディーダ

アフガニスタン事務所 （32名）

ナビ・ジャン（運転手）

イスラム教最大の聖地メッカへ巡礼に行きたいです！

デラワール（守衛）

現在守衛。2004年からJVCで働いてきましたが、今年こそ総務スタッフになりたい！

ザマヌラ・メムラワル（守衛 / 運転手）

家族が安心して過ごせるようJVCの仕事をがんばります。

イザトゥッラー（守衛）

アフガニスタンにおける教育と健康の向上を通じて平和の実現を目指します。

アブドゥル・ラジーク（守衛）

アフガニスタンでの教育にもっとも力を入れるようJVC本部にリクエストしたい。

アガ・グル・パチャ（守衛 / 運転手）

私の子どもたちがより良い教育を受けられるようアフガニスタンのため尽くした。

バスマナ（調理担当）

私の8人の子どもだけでなく、すべての子どもが教育を受けられるよう願っています。



左から：ホームパソン、ホンケオ、チャットウコーン、平野、レノル、グレン、ペダワン、フンパン、アロニー、クン、センサリー、枠内：スワニー

ラオス事務所 （12名）

平野 将人（現地代表 / 農業農村開発担当）

徒歩通勤や家庭菜園など持続可能な生活を継続、推進したいと思います。

グレン・ハント（森林プロジェクトマネージャー）

論文執筆を終わらせたいです。

フンパン・センチャント

（農業プロジェクトコーディネーター）

亡くなったお母さんの法事をしたいです。家族をサワナケートに呼び寄せたいです。

チャットウコーン・パイチット（農業スタッフ）

車を買って母親を色々なところに連れて行きたいです。

ペダワン・シーバット（森林担当）

新婚の夫や両親とベトナム旅行に行きたいです。夫の収入が上がるとういいます。

レノル・ブンペン（森林担当）

英語を勉強したいです。新年にはルワンパバーンに行きたいです。

センサリー・サイヤブット（農業担当インターン）

自分のバイク（ホンダウェーブ100cc）が買いたいです。英語も勉強したいです。

ホンケオ・ルワンディー（森林担当インターン）

英語を勉強して、インターンからスタッフになりたいです。

スワニー・マントンディ（VT事務所アドミ担当）

家の増築を終わらせたいです。

クンタノン・ワンタヌボン（庶務、通訳）

家の拡張を終わらせて、子どもたちに2部屋与えてやりたいです。

アロニー・ポンボッパー（会計）

両親をサワナケートに呼び寄せたいです。ゲストハウスの経営を始めたいです。

ホームパソン・タンマボン（運転手）

ゲストハウスを建てて経営を始めたいです。

アフガニスタン事務所 (32 名、続き)



枠内左上から
フルシード、
カー・ミル、
シャハブディン、
ママンナ、
ワグマ、
ジャナット・グル

ファティマ・カディム (地域保健担当)

アフガニスタン女性の自立のために、自分自身の技能の向上に努めたいです。

ママンナ (診療所助産師)

診療所の患者さんに質の高いサービスを提供したいです。

ワグマ (簡易診療所助産師)

2010 年を診療所の患者さんにとって幸運が訪れる年にしたいです。

フルシード (ワクチン接種担当)

診療所に来る患者さんのためにも去年よりいい仕事ができるようがんばります。

ハビブラマン (診療所守衛)

今年の抱負、それは昇給！

ジャナット・グル (診療所守衛)

去年より診療所をきれいにしたいです。

カー・ミル (診療所庭師)

診療所に緑あふれる美しい庭を造りたい。そのための道具をください！

シャハブディン (簡易診療所守衛)

アフガニスタンの平和のために誠実に職務に専念します。

アシール・モハンマド (簡易診療所守衛)

アフガニスタンの人々にとって 2010 年が幸せと平和が訪れる 1 年にしたいです。

エルサレム事務所 (2 名)



福田 直美 (現地代表)

蜜蜂の生態に近づき、おいしい蜂蜜を作る。



津高 政志 (現地調整員)

エルサレムのおっちゃんたちをバックギャモンで打ち負かし、地元で有名な日本人になる。

南アフリカ事務所 (3 名)



左からジョン、ティム、ドッドウジレ

ジョン・ンズィラ (ソウェト、リンポボ有機農業トレーナー)

祖国・ジンバブウェで新しく作っている農場を完成させる。

ティム・ウィグリー (環境保全型農業自然農業専門家)

自分の農場で、自分が作った野菜を食べ、自然を感じて平穏な日々を過ごしたい。

ドッドウジレ・ンカビンデ (プロジェクトコーディネーター)

野菜ざらいな "新しい家族" とともに健康的な食生活を送れるようがんばります。

イラク事業 (在ヨルダン)



原文次郎 (イラク事業担当 / 現地調整員)

隣国からの遠隔操作が続くが、イラク国内につながるための友人を増やす。

スーダン事業



今井高樹 (現地代表)

新しい活動地で、子どもたちと歌って踊って遊びたい。

なぜイラク戦争の検証が必要なのか

立教大学大学院教員 池住 義憲 いけずみ よしのり



YMCA、アジア保健研修所(AHI)などNGOで計三十五年の経験を経て、現在は立教大学大学院教員。元・自衛隊イラク派兵差止訴訟の会(名古屋)代表。

■検証なきところに 過ちの繰り返し

日本政府によるイラク戦争支持と自衛隊のイラク派兵の検証が必要なのか。歴史をみれば明らかだ。検証活動のないところでは、同じ過ちが繰り返される。

日本は九条がある平和憲法を持ちながら、これまで米国が行なった朝鮮戦争・ヴェトナム戦争・湾岸戦争に出撃拠点(安保条約下の在日米軍基地)を提供するなど深く関わってきた。しかし日本政府は、これらのいづれに關しても、正確な事実認定を行ない、それを広く市民にも情報公開し、憲法と国際法に照らしてチェックするといった検証作業をしていない。その結果が、今日のアフガニスタンとイラクでの米国による二つの戦争を支持・支援し、自衛隊の海外派兵へと結びついている。

イラク戦争への日本政府の関与(正確には『参戦』は、従来のものとは比較にならないほど、増幅した。歴史上初となった先制的自衛

権の行使で始まった米国の戦争、しかも攻撃の根拠とされた「大量破壊兵器の存在」と「フセイン政権とアルカイダとの関係」のいずれもが虚偽であった戦争を支持し、戦争が行なわれている国に重武装した自衛隊を派兵するなど、これまでの枠を大幅に超えた。

〇八年四月に名古屋高裁は、「少なくとも多国籍軍の武装兵員をバグダードへ空輸」した航空自衛隊の空輸活動を「他国による武力行使と一体化した行動」であるとして憲法九条一項違反と断罪した。しかし前政権(自公政権)は、これを無視し続けた。

■オランダ、英国の動きと日本

一方で、オランダや英国では検証作業が行なわれている。オランダは本年一月に独立調査委員会が米英軍のイラク侵攻を「国際法上の合法性を欠く」とした報告書を発表した。英国は昨年七月に独立調査委員会を発足させ、本年三月までにブレア前首相をはじめとする関係者の証人尋問を終えて本年

内に報告書が公表される予定だ。

日本はどうか。前政権下の〇七年五月、衆院本会議で「改正イラク復興特措法」が可決されたときに、当時野党だった民主党が強く主張して取り入れられた附帯決議のなかには、「イラク戦争を支持した当時の政府判断について検証を行なう」と明記されている。その後、昨年九月に政権交代となり民主党中心の連立政権が発足したが、いまだその責任を果たしてはいない。

■検証を求める市民からの動き

こうした状況のなかで、政府にイラク戦争の検証を求める市民からの動きはある。昨年十月、「自衛隊イラク派兵差止訴訟」全国弁護団連絡会議は鳩山首相に対し、イラク戦争開戦支持判断を検証すること、五年に及んだ自衛隊派兵行為を憲法の観点から検証すること、戦争遂行方法を国際法の観点から検証すること、シビリアン・コントロール機能を検証することなど、直接内閣府へ赴いて要請書

を手渡した。

これに続いて昨年十一月より、ジャーナリストの志葉玲さんらが中心となって「イラク戦争の検証を求めるネットワーク」を立上げ、政府に対して独立した「第三者検証委員会」設置を求めている。これに呼応して、国会内では民主・社民両党の有志議員が国会議員に賛同署名を呼びかけている。フリージャーナリストの布施祐仁さんは、部分的に開示された外務省の関連外交文書(大半は黒塗り)から、イラク戦争開戦前から日本政府が米国と秘密裏に会合を重ねていた事実を指摘している。※注①

■「法の支配」と「立憲主義」確立のために

新政権は、マニフェストで「法の支配」と「立憲主義」を最重要視している。これらを確立するためには、イラク戦争関与に関する調査・検証・総括を行なう「検証委員会」設置は欠かせない。新政権に検証作業を実行させよう。過ちを繰り返させないために。

ラオスで生きていく秘訣?

ラオス事務所 現地代表 平野 将人



イラスト/かじの 倫子

ひょんなことで知り合った中国人旅行者が、なんとムエラオ（ムエタイ）の試合に出るという。ボクシングの経験はあるが、キックボクシング経験は皆無。そして試合は10日後。出る彼も彼だが、運営側もよく了承したものだ。

試合まで数日のある日、相手はキューバ人との情報が。キューバってあのボクシング大国の？ しかし翌日、今度はキューバという名のラオス人という話になった。いるのかそんな名前のラオス人。

いよいよ当日。結局、試合相手は

変更になったとのこと。しかし、考えてみれば相手の利き腕すら知らされていないのだから、名前の問題じゃない。来た相手とやるだけか。

3時と言われていた試合開始が、5時半になったと言うので5時15分に会場到着するも、今度は6時だと言われる。時間変更の理由は聞かれないが、説明されてもどうなるものではない。ラオスにいて、立てても仕方のない筋道を必死で立てきたのでは、と思う瞬間がある。

6時も近くなって会場に戻るとまだ閑散としていたが、じきに立ち見

も出る盛況に。正直どういうメカニズムなのかわからないが、ラオス人がいつでも「ボーペンニャン（大丈夫）」と微笑んでいられるのはこういうことなのである（ボーペンニャンじゃすまないこともあるけれど）。

試合のほうは、3ラウンド開始前に彼が棄権を申し出る。コーチは一瞬あっけにとられつつも、本部席に「もうムリだって」と笑いながら告げ、外国人に親切なラオス人たちは笑いながらもやんやの喝采を送った。ラオスらしさが端々に感じられた今回の一件でした。

『行動する市民が世界を変えた』

クラスター爆弾禁止運動とグローバル NGO パワー

みるよむきく

めかたもとこ 目加田 説子 著/毎日新聞社/2,000円+税



戦闘行為において広範囲を一気に制圧するために使われるクラスター爆弾は、親爆弾から大量の子爆弾を放出するよう設計されている。その子爆弾の多くが不発弾として地表に残り、戦闘が終わった後にも一般市民に酷い被害を与えていることが、九〇年代後半には NGO によって報告されていた。

戦闘行為において広範囲を一気に制圧するために使われるクラスター爆弾は、親爆弾から大量の子爆弾を放出するよう設計されている。その子爆弾の多くが不発弾として地表に残り、戦闘が終わった後にも一般市民に酷い被害を与えていることが、九〇年代後半には NGO によって報告されていた。

本書は、クラスター爆弾を禁止する条約を作ろうと〇七年二月から始まったオスロ・プロセスと、同時に繰り広げられた NGO のキャンペーンについての記録である。クラスター爆弾禁止に向けて動いた NGO と有志の国々の挑戦、それに反対する国の動向。その中には、当初はクラスター爆弾の全面禁止に賛同しなかった日本政府と、その日本政府の政策転換を求めて動いた NGO、地雷廃絶日本キャンペーンの活動も含まれる。著者はこの NGO の理事でもあり、市民社会や軍縮に詳しく、オスロ・プロセスのすべての国際会議に出席し、各国の発言をつぶさに見つめてきた。本書には、世界中の仲間たちと NGO のキャンペーン戦略を立ててきた著者の冷静な分析が随所にちりばめられている。

（地雷廃絶日本キャンペーン 事務局長 内海 旬子）

JVC は、現在 9 の国 / 地域で活動しています。

カンボジア

■生態系に配慮した農業による生計改善 (CLEAN)

07 年からシェムリアップ県東部の 35 村で活動を行っている。乾季にあたるこの時期、栄養菜園と堆肥研修を中心に活動を行っている。また、4 月以降のプロジェクト第 2 期の活動に向け、現在の活動の達成状況を調査したところ、研修に参加した約 8 割の人が研修で学んだ技術を実践で活かしていた。情報の共有や種の交換などが農民同士で活発に行なわれていることも明らかになり、活動の成果を示す結果となった。

■環境教育

09 年 4 月からシェムリアップ県東部の 4 つの小学校で実施している。2 月に小学校の教員を対象に図書館司書研修を実施した。また、4 月以降新たに環境教育を行なう学校を選定するための調査活動を実施中である。その他、3 月から土曜日を利用して環境と開発の連続講座を開始し、15 名の大学生が参加している。

■資料・情報センター (TRC)

持続的農業、農村開発、環境に関する資料を 94 年から提供している。利用者の要望に応え、4 月から土日も開館することとなった。それに合わせて、大学生のパート職員の募集と選考を行なった。これにより、さらに利用者が増加することが期待できる。

■技術学校

85 年に政府と合意し、プノンペンで職業訓練校と付設整備工場を運営している。1 月に経営改善の一環として、専門家を招き、シニアスタッフを対象に経理に関する研修を実施した。また、ボランティアの日本人専門家が 2 月より 3 ヶ月間滞在し、修理技術や工場経営に関するアドバイスをを行なってくれている。(以上山崎)

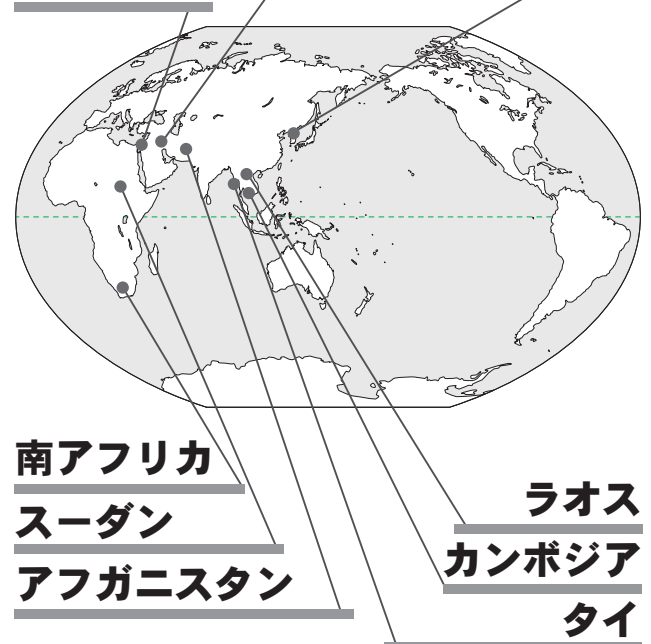


■はじめて堆肥づくりに挑戦する村の女性たち。

イラク

パレスチナ

コリア



南アフリカ

スーダン

アフガニスタン

ラオス

カンボジア

タイ

ラオス

■森林保全／農業・生活改善事業 (サワナケート県)

1 月後半から 2 月に 8 村で参加型農村調査を実施。既存 5 村、新規 10 村の全 15 村体制

となった。米不足、水不足、家畜の死など、各村で問題としてあげられる内容には共通性も高いが、その程度や原因は少しずつ異なる。また、土地問題については、植林企業の進出度合いによって、村人の不満、あるいは危機感に相当の差異が見られた。

乾季ということで、農業チームは主に水支援に奔走。井戸 4 基を新たに掘削し、2 村で修理も行なった。そのほか新規村 8 村でも水不足の現状の調査、解決のための話し合いを進めた。森林チームは、引き続き土地森林に関する法律についての研修を 1 村で行なった。その他、土地森林に関する村人の権利意識啓発を意図した人形劇の実施に向け、ラオス国立大学から講師を招き、ブルー族若者チームに研修を行なった。1 月末には森林問題に取り組む NGO の会合にも参加した。また、2 月には森林チームが、3 月には農業チームが 1 組ずつスタディーツアーの受入れも行なった。(平野)



■村の問題を話し合う (参加型農村調査)。

スーダン

■車両整備を通じた難民帰還支援

06年以来、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）との事業提携契約に基づき、「車両整備による難民帰還支援事業」と、元難民の若者を対象にした「整備士研修による帰還民定着支援事業」の二本柱による活動を実施してきたが、09年12月末をもって契約が満了。整備工場の運営もJVC事業開始以前の運営主であるスーダン教会評議会（SCC）に返還された。

今年1月より「SCC整備工場」として再出発をした工場は、南部スーダン政府、教会組織、人道支援団体などを顧客として賑わいを見せ、独立採算の目途も立ち始めた。学科授業と実技から成る整備士養成コースも10名の研修生も迎えて継続されている。3月末をもって本プロジェクトは完了となる。

■新規事業の調査

10年度に開始予定の新規プロジェクトについて、3月に南コルドファン州を訪問し調査を実施した。スーダン南部と北部との境界線付近に位置し、和平合意の中では南北が共同統治する「暫定地域」とされた同州は、人道支援のニーズも非常に高い。今後、JVC内部での承認手続きを経て10年度半ばからの事業開始を目指す。

和平合意後初めてとなる総選挙は、4月の投票日が間近に迫った。ジュバ市内では候補者のポスターがいたるところに掲示されるなど選挙活動が熱を帯びつつある。しかし、地方部では投票所の設置場所も定まらないなど、実施に向けては問題が山積している。（以上今井）



■南コルドファン州リリ地区の牧畜民を訪問した今井。

南アフリカ

■HIV/エイズ（リンボポ州）

農村でのHIV/エイズの治療に関する研修、栄養改善のための菜園づくり研修、患者や孤児へのケアを行なっている。2月上旬に地域の在宅介護ボランティアを対象に、下旬にHIV陽

性者を対象とするHIV/エイズの治療に関する研修を実施した。それぞれ09年6月・9月に行なった研修のフォローアップということで、前回からこれまでの間に生じた課題や前回の研修に関して議論・振り返りを実施し、これに基づいてより実践的な研修を実施した。HIV陽性者の研修では、ステータスの公表にまつわる議論があり、感染期間の短い陽性者から「励まされた」などの声が聞かれた。菜園活動では、これまでの研修を活かし、参加者たちだけで地域内の実践をモニタリングできるように活動を開始している。

■地域住民を対象とした菜園研修（ハウテン州ソウェト地区）

ジョハネスバーグ市の南西にある旧黒人居住地区・ソウェトにて中学校の敷地を利用した地域住民対象の菜園研修を実施している。1月27～29、3月3～5日に研修を実施した。真夏を迎え繁殖した雑草を取り、種がなく有機肥料として使える雑草とそうでないものの違いを学んだ。じゃがいも、トウモロコシ、ほうれん草、トマト、豆などが収穫期を迎えているが、参加者はすでに自分たちで次期栽培に向けて苗作りをするなどこれまで学んできたことを活かすことができている。学校菜園の野菜について自家消費・販売した野菜を記録したところ、月約5,000円程度の支出減・収入につながっていることがわかった。（以上渡辺）



■トレーナー（中央）から畑のモニタリング方法を学んだ。（リンボポ）

イラク

■地域社会再生のための活動支援

イラク北部キルクークで活動する地元NGOと協力し、多様な背景をもつ住民自身による、対話と相互理解をすすめる活動の一環として、子どもたちの絵画共同制作ワークショップを実施し、発表会を開催した。参加した児童40人は小学校6年生にあたるが、その弟妹も参加した例もあった。当日参観した保護者や地域住民からも好評を博し、次回を期待する声も高い。

■ガン・白血病医療支援

モスル、バグダッド、バスラなどの病院への支援を継続中。

■政策提言

3月21日、「イラク戦争検証ネットワーク」の加盟団体として、「イラク戦争なんだったの!? 検証シンポジウム」を開催した。一般参加者は約120人、活発な質問が続き、この問題に対する関心の高さをうかがわせた。（以上谷山）

タイ

■農村派遣研修

国際協力を志す日本人をタイの農村に派遣し、NGOの役割や支援のあり方を考える機会を提供している。2月中旬にJVCカンボジアを訪問、CLEANプロジェクト対象村での堆肥研修やフォローアップを見学してカンボジアにおける課題を知った。コンケン県ポン郡の有機農産物直売市場委員会に対して、タイ国内の有機市場の報告をし、ポンの直売市場が抱える課題を話し合った。最後に2年間のインターン活動での学びを発表し、インターンを締めくくった。（宮田）

■南タイでの在タイビルマ人支援

南タイのパンガー県において、ビルマ人労働者に対しての医療支援を実施。3月8日から日本の大学生のスタディツアーを受け入れた。（下田）



■カンボジアの堆肥研修を見学。

パレスチナ

■ガザ栄養改善支援

ガザの幼稚園児約320名への栄養改善支援。西岸へブロン産牛乳とラマッラー産ビスケットを配布中。ハンユニスの栄養センターでは、栄養失調児に対して栄養価の高いセモリナ粉や豆など家庭への持ち帰り用乾燥食材を配布中。3月に家庭訪問に実施、乾燥食材が子どもたちの家庭で適切に使用されていることを確認した。



■保健指導教材について現地医師と話す広報の広瀬(右)。

■健康教育・巡回診療支援

現地の医療NGOと協力し、エルサレムの壁の両側の学校や幼稚園などで健康診断、保健教育などの巡回診療活動を実施。また、緊急救命・応急処置の出前授業を看護師を対象に行なった。3月には保健分野の専門家として藤屋、視聴覚教育の専門家として広瀬が出張、医療チームの活動を視察し評価および活動改善のための協議を行なった。

■収入創出支援

ベツレヘムの難民キャンプ内のハンダラ文化センター女性グループの刺繍プロジェクトを支援。アユス仏教国際ネットワークの協力で、ベツレヘムのオリーブ玉を使った平和念珠作りも継続。3月には日本のパレスチナボランティアチームのメンバーが訪問し、日本での刺繍製品の販売の様子などを伝えて親交を深めた。また、他の女性グループを訪問して学びとする研修旅行を女性たち自身が計画。

■平和創造・平和構築

東西エルサレムで、女性たちのエンパワーメントを目指したプロジェクトを実施中。09年の活動について振り返りと評価のミーティングを行なった。(以上福田・津高)

アフガニスタン

3月中旬から約3週間、事業担当兼現地代表の長谷部、保健アドバイザーの西と会計担当の下田が現場に出張し、12月の医療専門家招聘後のフォローアップ、10年度の活動計画の確定、会計体制の強化、毎年3月末が期限となるスタッフ契約の更新などを行なった。



■初めてのグループワークで授業案を作成する研修参加者。

■女性と子供の健康改善のための地域保健医療事業

1月から本格的に始まった患者の病気の再発防止・予防につなげるためのシステム運用への準備が大詰めに入り、ファミリー・カード(診察券)の各戸配布が地域保健員などと協力して終了した。また昨年8月から始まった母親教室が3月に終了した。女性たちの健康に関する知識や意識が向上したことは研修前・後のテストから明らかになった。

■教育支援活動

06年からナンガルハール県シェワ郡で継続的に開催している小学校低学年教員対象の研修を、今年も2月中旬に実施した。31校から82名(内14名が女性)の教員が参加し、1～3学年の教科書指導書を使用し授業案の作成や模擬授業を通し具体例が提示され活発な意見交換が行なわれた。

■政策提言

1月28日にロンドンで開催されたアフガニスタンに関する国際会議に先がけ、アフガニスタンで活動する国際NGOがPRTなどの弊害や危険性を訴える声明を発表した。これを受けて、JVCは日本による人道支援の重要性と現地主導の社会再建のためにアフガン国内NGO支援の可能性を探るよう、日本の外務省に提言した。(以上谷山由)

調査研究・政策提言

■現場と連携した調査研究活動

①2月7日から14日までラオスを訪問し、今年秋に名古屋で行なわれる生物多様性条約会議(COP10)を視野に入れたアドボカシー活動について話し合った。ラオスでは、ベトナム系企業によるゴム植林が拡大しつつあり、森林が伐採され、村人の生活が影響を受け始めている。村人の森林へのアクセスの権利に基づいた新土地森林委譲のあり方についてJVCラオスと話し合った。

②2月22日から3月16日までスーダン(南コルドファン州)を訪問し、遊牧民の暮らしや帰還兵の社会復帰状況、平和構築プロセスの進捗状況について調べ、JVCスーダンの新規事業の検討作業に協力した。気候変動による干ばつと水不足、和平に伴う開発(大土地機械化農業の導入)による土地収奪によって新たな格差や紛争の火種がくすぶっている。(高橋)

コリア

■絵画交流『南北コリアと日本のともだち展』

大阪で開催されたワン・ワールド・フェスティバル(2月6,7日)において、『南北コリアと日本のともだち展』の活動紹介や参加作品の展示を行なった。



■日・朝・韓の共同制作に、さらに大阪の子どもの絵が加わった。

共同作品を見た子どもたちの要請で急遽その場でお絵かきコーナーを設置した。来場者からは「子どもたちの表現活動を通して、日本、南北朝鮮の将来を担う子どもたちが交流してゆくことを願う」「子どもたちの環境が絵にあらわれている」などの感想が寄せられた。

■次年度交流事業の計画

今年10周年をむかえる交流事業『ともだち展』の企画を、実行委員会を中心にしてすすめている。(以上寺西)

JVC 30周年大同窓会 たくさんの人生を 変えてきた30年。

今年三十歳を迎えるJVCの大同窓会が二月二十七日に昭和女子大学で開催されました。設立当初から関わっている方から、最近関わり始めた方まで総勢百五十名を超えるスタッフ・ボランティア・インターンの参加があり、世代を超えた交流が行なわれて大変盛り上がりました。

会場には八〇年代、九〇年代、〇〇年代と年代を追ってJVCの思い出の写真を掲示できる場所を設けました。当時の様子やこれまでの移り変わりを知ることができました。また、百三十名の方々に寄せられたメッセージも掲示しました。「あのころのJVCの『天衣無縫さ』『野放図さ(いい意味で)』で得たエネルギーは、その後の自分の活動の源泉のひとつです」「JVCのNGOスピリットの中に、『生き方』と『つながり方』を学びました」といったJVC三十周年の原動力の源を感じるメッセージや、「活動報告をしつかりPRすること」「理念のみでなく実のある活動を目指してほしい」といった要望、「参加できませんが」心はJVC三十周年同窓会と共にあります」というあたたかい言葉。これから、今はJVCに直接携わっていないように

に思えても、常に多くの方に見守られ励まされていることを強く感じました。

同窓会と呼びかけ人である星野さんの挨拶から始まりました。会場は参加者が久しぶりの再会を喜び合う声で、マイクの声すらも届きにくい状態でしたが、JVCクイズなどのアトラクションを交えながら和やかな雰囲気で行進しました。また、初対面でも自分がJVCとどのように関わっているのかを互いに紹介しあっている方々の姿もみられました。

リレートークコーナーでは、何があっただけでJVCと出会ったのか、どのような想いでJVCに携わっていたのかなど、各年代を代表して六名の方が思い出を語ってくださいました。JVCがソマリアでこんな大人数で活動していたということや、どのようなきっかけで緊急支援が始まったのか、こんなにもJVCで知り合ったカップルがいっぱいしやるんだ！など、今まで知らなかったJVCの一面を知ることができました。

全体を通じて感じたのは、三十年経った今でも、このようにたくさんの方々がJVCとつながっていることや、JVCを通して交流があることはとても素晴らしいことだということです。また、JVC

「JVCの人たちは 自分たちは世の中を変えられると本気で思っている。それはJVCのDNAとも言える。五十年、百年先を見ながら変えていきたい」という谷山代表の挨拶が特に印象に残っています。何年経っても変わらない人と人とのつながりを築きながら、世界を少しずつでも変えていく。これからもそんな団体であってほしいと思います。

(〇九年度インターン
浅岡 利咲・吉田 さくら)

国内ひろば

JVC network



■懐かしい面々に出会って、あちこちに話の輪が。



■星野昌子さんの開会挨拶からスタート。



■最後に全員で記念撮影。

募金にご協力ありがとうございます

JVC の活動は、皆さまの募金に支えられています。
JVC への募金は税制優遇措置を受けることができます。

① JVC 募金 (郵便振替)

JVC の各国での活動に役立てられます。募金先をご指定いただくこともできます。

口座番号: 00190-9-27495
加入者名: JVC 東京事務所

1 月計 1,476,856 円
2 月計 1,045,647 円

	1 月	2 月
無指定	132,363 円	103,717 円
タイ	2,500 円	0 円
カンボジア	221,425 円	338,250 円
ラオス	27,425 円	12,250 円
ベトナム	0 円	0 円
南アフリカ	13,000 円	320,208 円
パレスチナ	274,426 円	109,222 円
アフガニスタン	296,217 円	140,000 円
コリア	3,500 円	0 円
イラク	6,000 円	22,000 円
スーダン	500,000 円	0 円

※上表には「冬の募金」は算入していません。

② 犬養道子「みどり一本」募金

JVC 活動地での環境保全活動に使われます。

口座番号: 00100-8-212497
加入者名: 犬養道子「みどり一本」

1 月計 117,500 円 / 19 件
2 月計 46,500 円 / 12 件

③ JVC マンスリー募金

銀行や郵便局の口座、クレジットカードから自動引き落としできる手軽な募金方法です。

1 月計 2,092,050 円 / 1,704 件
2 月計 2,051,150 円 / 1,710 件

編集後記

新しい東京事務所インターンの面談を実施。数年続いているので、「国際協力に関心があって」という志望動機がいかにも「意味がない」かわかる。なぜ？
どのような？その関心を深めるために何をしてきた？…それらへの答えが、他人の言葉や単なる感性なら、その人である必要はない。何事も、具体的な名前やデータや行動そのもので表現しよう、と自戒を込めて思う次第。(H)

新スタッフ紹介

樋口 正康
ひぐち まさやす



カンボジア事務所環境教育担当

サッカー選手になるため、諸国を放浪した十代。二十代半ばまで、大学・大学院とカンボジアの教育とジェンダーの問題について研究しました。卒業後、カンボジアで働く機会を探して JVC に出会ったものの夢破れ、日本社会での再出発を余儀なくされました。その後、研修生として拾われて今に至ります。

今後、カンボジアで農村開発に従事していくわけですが、カンボジアの人々が自らの力で発展していくために、そのお手伝いをしたいという思いが根底にあります。エコな農業と環境教育の活動を柱に、自然と共存していく道を探り、将来を担う人材の育成を目標に活動していきます。そのために、まず自身が学ぶことが大切です。現地の人々と共に笑い、共に泣き、共に成長しながら、一歩一歩前に進んでいきたいと思っています。

宮田 敬子
みやた けいこ



東京事務所タイ事業担当

「タイの農村で学ばいターンシッププログラム」でタイの農村に一年間滞在後、もう一年延長して約二年間タイで暮らしました。農村開発に携わりたいと思っていましたが、タイの農村の人々と接するにつれて人対人で真剣に向き合うことの楽しさや苦しさ、農業の素晴らしさなどを学びました。そして、もっとタイの人たちやタイ事業に携わる人たちと関わりたいと思うようになりました。

現在タイは経済的な発展を遂げ、現地 NGO も数多く存在しているなかで、海外 NGO の役割が模索されています。タイの農村、社会問題は日本の問題と共通している部分があります。今後、共通の問題意識、仲間意識を作れるようなプロジェクトを進めていければと思っています。

2009 年冬募金にご協力くださり、ありがとうございました。

カンボジアの農民、南アフリカの HIV 陽性者…、皆様のご支援は多くの人の暮らしを改善する力になっています。この冬も、1,100 万円を超えるご支援をいただきました。ご協力に心より感謝いたします。

2009 年冬募金集計 (2009/11 ~ 2010/2)

1,521 件 11,773,508 円

[募金額の 20%以内は管理費とさせていただきます。また、上記冬募金の金額は、ページ左上の JVC 募金の欄には含まれていません。]

JVC ウェブサイト 会員専用ページパスワード (2010 年 5 月 ~ 6 月):

J8UghV31xL

JVC ウェブサイトの会員専用ページでは、T&E のバックナンバーを順次公開中です。

第 11 回 JVC 会員総会のお知らせ

日時：2010 年 6 月 12 日（土）10：00～13：00

会場：豊島区立生活産業プラザ『ECOとしま』多目的ホール

議案：1) 2009 年度活動報告および決算報告

2) 2010 年度活動計画および予算案

年に 1 回、多くの会員の方々と一同に集える場である会員総会を今年も実施いたします。
JVC の活動を通して世界各国の課題を共に考える場でもあります。ぜひご参加ください。



■人道支援の活動の報告を行なう長谷部。彼自身、アフガニスタンに 09 年度に数度出張した。



■午後の交流会では、JVC ラオス事務所のラオス人スタッフ（左から二人目）、タイ NGO のスタッフ（同三人目）の話聞く機会を設けた。

例年と同様、総会終了後の午後に、交流会「JVC のつどい」を企画しておりますので、こちらにもご参加ください。参加される場合には昼食をご持参ください。詳細は、6 月初頭に別途お送りします議案書に同封 / 記載いたします。



日本国際ボランティアセンター（Japan International Volunteer Center）は、1980 年 2 月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVC の活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられるアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志で JVC に参加し、活動を継続してきました。JVC はボランティアという言葉を、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

■ JVC では会員を募集しています。

会員は総会に出席し、JVC の方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年 6 回この会報誌と年次報告書をお届けします。

- ◎一般会員 10,000 円
- ◎学生会員 5,000 円
- ◎団体会員 30,000 円

※それぞれに正会員と賛助会員があります。
入会のお申し込み、会員の方のメールマガジンのお申し込み、住所変更などは会員担当の寺西へ。

→ s-tera@ngo-jvc.net

■オリエンテーション（説明会）にお越しください。

JVC の活動内容をご紹介します。お気軽にご参加ください。
会場は JVC 東京事務所、参加費は無料、予約不要です。

- ◎第 1 月曜日午後 7：00 - 8：30
- ◎第 2・第 4 土曜日午後 2：00 - 3：30

■ E-mail

info@ngo-jvc.net

■ウェブサイト

<http://www.ngo-jvc.net/>

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。

※本誌は、日本の森の間伐材を有効利用して作られた用紙「間伐材印刷用紙」（古紙 90%、間伐材パルプ 10%）で作成しました。

※本誌は、イーパーツ寄贈プログラム「Adobe ソフトで市民活動も、クリエイティブ力&デザイン力 UP！」提供の Adobe Creative Suite 3 Design Premium で作成いたしました。

